

ブルーリズムをめぐる多面的状況

——第3回国際マレーシア学会議から考える——

井口由布（東京外国語大学大学院）

第3回国際マレーシア学会議(Third International Malaysian Studies Conference)が、2001年8月6日から8日までマレーシア国民大学(Universiti Kebangsaan Malaysia; UKM)において開催された。最新のマレーシア研究についての成果を発表する場である同会議は、1997年にマラヤ大学において第1回会議が開催されて以来、1年おきに開かれている¹。主催したのはマレーシア社会科学学会(Persatuan Sains Sosial Malaysia; PSSM)であり、共催者として名前を連ねているのはUKMの研究機関である国際／マレーシア問題研究所(Institut Kajian Malaysia dan Antarabangsa; IKMAS)とマレー世界／文明研究所(Institut Alam dan Tamadun Melayu; ATMA)である。プログラムによれば、3日間に32のパネルが設けられ、合計121の報告が行われた。報告の内容は多岐にわたり、社会科学の諸分野だけでなく、言語や文学、環境問題、科学技術などにかんするトピックがプログラム上に並んだ。基調講演は、Harun Mahmud Hashim、Hans-Dieter

Evers、Yoshihara Kunioによって行われた²。また、2日目の午前中には“Pluralism in the Malay World”と題したATMAによるメインパネルが、最終日の最後のセッションにはIKMASによるラウンド・テーブル討議(“Discourses and Processes of Globalization: Redefining Malaysian Studies”)が行われた。マレーシアからの報告者が圧倒的に多数であったが、日本からも3人の大学院生を含め、基調講演の他に8人の報告があった³。

² 演題は、順に“Human Rights in Malaysia: One Year of SUHAKAM”(Harun)、“On Knowledge Society”(Evers)、“Institutions, Culture and Economic Growth”(Yoshihara)であった。

³ 日本人参加者の報告題名は以下の通り(報告順)。
篠崎香織(東京大学大学院) “The Development of Chinese Education in Malaya”
山本博之(東京大学) “The Pasok Momogun Movement in Sabah in the 1960s”
中原道子(早稲田大学) “‘Comfort Women’ in Malaysia: Testimony of the Women’s International War Crime Tribunal in Tokyo, 2000”
明石陽至(南山大学) “Nanyo Kyokai (South Sea Society): Its Activities in British Malaya, 1915-1941”
桑原尚子(名古屋大学大学院) “Freedom of Religion in Malaysian Context”
濱四津菊枝(オーストラリア国立大学大学院) “Dominance, Dependence and Political Ascendancy: ‘Islamisation’ of the Malaysian State Re-examined”
吉村真子(法政大学) “Economic Development and Migrant Workers in Malaysia: Indonesian Workers in Estates”
舛谷鋭(立教大学) “Ethnic Literature and

¹ 第1回会議と第2回会議の報告のいくつかは、Jomo K.S.編集の*Rethinking Malaysia* (Kuala Lumpur: Malaysian Social Science Association, 1999)および同編集の*Reinventing Malaysia: Reflections on its Past and Future* (Bangi: Penerbit Universiti Kebangsaan Malaysia, 2001)において読むことができる。

さてつぎに、わたしがとくに気になった ATMA によるメインパネル“Pluralism in the Malay World”に目を向けてみよう。議長は ATMA のディレクターである Shamsul A. B.、ディスカッサントは同じく ATMA の S. Hussein Alatas であり、パネラーはマレーシア内外から 5 人、Robert Hefner (Boston University)、Yao Souchou (University of Sydney)、Wendy A. Smith (Monash University)、Zawawi Ibrahim (UNIMAS)、Jim Collins (ATMA, UKM)であった⁴。

狭い部屋へ大人数で押しこまれてこれらの報告を聞いて、マレーシア学における共通の理論的基盤について考えさせられた。「マレー世界におけるプルーラリズム」という問題設定にたいして 5 人のパネリストが応答したわけだが、それぞれによって提起される問題が微妙にかみあっていないか、時間切れで質疑応答もなかったため、提起されたそれぞれの問題を整理したり吟味したりする機会が得られな

かったのは残念であった。だが、「マレー世界におけるプルーラリズム」という主題からどのような問題が提起されるかがわかり、興味深く聞くことができた。

このパネルでペーパーを提出したのは Zawawi Ibrahim 一名で、あとの論者にかんしては筆者がとった不完全なノートがあるのみというまことに頼りない状況であるが、できるかぎりのコメントをしてみたい。このパネルにおいてそれぞれの議論がかみ合っていないように感じたのには大きく二つの理由がある。まずひとつは、論者によってプルーラリズムというキーワードにたいする理解の仕方にばらつきがあり、その違いをそれぞれの論者があまり明確にしなかったことである。もうひとつは、マレー世界という枠組みへの反応が少なく、議論が国民国家論へと横滑りしていたことである。

*

まずはプルーラリズムという問題領域をわたしなりに整理してみたい。もうお気づきかと思うが、わたしはプルーラリズムをカタカナのままで使っている。これは、「プルーラリズム」によって、日本語では少なくとも三つの翻訳語とそれに対応した三つの問題領域が想定されるからである。まず第一の問題領域は、マレーシア学ならびに東南アジア学においてよく参照される J・S・ファーニヴァルの複合社会論が提起したものである。そこでは植地的な領域が相互に連関を持たない複数の諸社会からなりたっていることが指摘される。社会を有機的な統合体とみなすこの議

National Literature in Malaysia”

なお、今回および前回の国際マレーシア学会議で報告されたペーパーは、PSSM のウェブサイト<<http://phuakl.tripod.com/pssm/homepage.htm>>で閲覧することができる。

⁴ 報告題目はそれぞれ、“Cultural Pluralism in Malaysia and Indonesia: Varieties of Malay Multiculturalism”(Hefner)、“After the Malay Dilemma: New Malay Subjectivity and the Cultural Logics of ‘National Cosmopolitanism’ in Malaysia”(Yao)、“Refashioning Pluralism in the Malay World: The Impacts of Japanese New Religion in Malaysia and Singapore”(Smith)、“Situating the Indigenous Non-Malay ‘Other’ in the ‘Malay World’”(Zawawi)、“Pluralism and the Malay World Languages”(Collins)。

論のもとでは、相互に関連を持たない複数の社会からなる植民地的領域は社会とはみなされない。まさにそれゆえに、国民国家を近代社会における理想的形態として肯定する立場をとるものたちは、ファーニヴァルの複合社会論による現代マレーシア社会の分析にたいして否定的態度をとることになる。あるべき統合された社会からの逸脱もしくは遅れのイメージが複合社会論につきまとうのはこの点においてである。

第二は、多文化主義的な問題領域である。多文化主義による社会とは、統合された社会の内部に下位集団としての複数の社会もしくは文化があり、それら相互に関連しあい、その複数社会のあいだは平等で調和があるような状態である。これは一見複合社会論に似ているが、多文化主義における社会では、その下位にある複数社会に相互の関連があり、調和が達成されているうえに、それらによってさらに大きな統合体を形成しているところに複合社会論との相違点がある。これは国民国家のひとつのあり方として提起されている。

プルーラリズムの三番目の問題領域は、多様性や異種混交性にかんするものである。ここでは、第一や第二に見られる有機的統合体としての社会という見方に疑問を提示し、社会を本質ではなく偶発性のもとで、歴史的に作られたとみなしている。ここでの多様性や多元性は、差異が本質的なものではなく連続的なものであり、ある一定の差異だけが優劣の判断の支配的な基準として歴史的に構築されてきたという考え方に基づくものである。

国民国家との関係でいえば、この意味でのプルーラリズムは、国民国家そのものが差別と排除の論理から成立していることを指摘し、それを超克しようとする議論であるといえよう。

*

さて、最初の報告者である Hefner はプルーラリズムという問題設定にもっとも敏感に反応し、ファーニヴァルの複合社会論が不変的で固定的であることを批判し、これにエスニシティの流動性、異種混交性を対置した。この意味で Hefner は第三の問題領域へ目を向けているようであるが、時間性的問題が明らかにされていないという印象を受けた。続く報告者である Yao の問題関心もプルーラリズムの第三の問題領域の方へ向けられていたようであり、フーコーの『知の考古学』やラカン派の精神分析論などを引き合いに出しながら、他者との関係において主体 (Yao によれば主体性だが) が構築されるということに言及した。ただし、これらの構成された主体にかんしてかれがファンタジー(fantasy)=空想という言葉で受けるとき、主体の構築という問題が認識上のことだけでなく現実の再構成をも含んでいることが曖昧にされているように感じられた。

第二の問題領域においてプルーラリズムに反応したのは Zawawi Ibrahim であろう。かれは、単一の国民文化による国民国家モデルにたいして多文化主義的な国民国家モデルの可能性を模索する。かれがいう多文化主義は、複合社会論を否定しながらもそれを流用して

きた現代マレーシアの多文化主義(マレー人、中国人、インド人、その他という分類)を批判し、この多文化主義が非マレー系ネイティブ社会の多様性を「その他」のカテゴリーのもとで抑圧し隠蔽してきたと指摘している。しかし、より広いマレー世界という枠組みを見据えてサバやサラワクのネイティブの多様性を議論しているにもかかわらず、かれの議論は国民文化論に終始し、近代国民国家としてのマレーシアという枠組みへの批判的問い直しを避けようとしているように受け取れた。

プルーラリズムの第一の問題領域に反応したのはディスカッサントの S.Hussein Alatas である。マレー世界ではなく国民国家論としてのプルーラリズムを念頭においた議論を展開し、ファーニヴァルの分析を植民地主義的なイデオロギーであると批判した。このように、同じ言葉を使いながらも各論者がそれに込めた意味がそれぞれ異なっていたのである。

*

さて、次に二つ目のマレー世界という問題に移ろう。ここままで明らかなように、プルーラリズムという問題を社会的なるものとかかわりなく論じることは理論的に不可能である。今回のパネルにおいて問題にされるべき社会的なるものはマレー世界であるはずであった。しかしながら、マレー世界という枠組みでの議論は奇妙にも国民国家を念頭においた議論へとずらされていった。マレー世界という枠組みにおいてまともに応答したのは言語学者の Collins のみであったといえよう。かれは、マレー語の使用地域をマレー世界と

定義し、そこにおいてマレー語以外の多種多様な言語が使用されていることを指摘した。かれのいう多様性は、どちらかといえばプルーラリズムの第一や第二の問題領域内に入るものであろう。だが、言語を閉じられた体系とみなし、数えられるものであると考えることにたいする疑問は提出されていない。

マレー世界という考え方は、国民国家という枠組みそのものを超克したり批判したりする議論ではないが、現在のマレーシアという国民国家の領域に対抗する議論といえるだろう。東南アジア地域においてしばしば問題にされることに、近代国民国家の広がりと民族の空間的広がりとのずれがある。マレー世界という議論が登場するのはこの場面である。植民地主義によって分断される以前の、文化的に結びついた統一体として想像されるマレー世界とは、ある人々によってはあるべき国民の姿でもある。このパネルは、そうした極度に政治的な枠組みでもあるマレー世界を、均質な統合体としてではなく多様性をはらんだ空間として提議した。これはマレー世界概念の持つ政治性を緩和するためなのか、それとも別の意味を持っているのか。また、マレー世界にたいして積極的な反応を見せなかったパネリストたちの態度をどう見るべきなのか。

今回のパネルにおいて提起されたのは、現代マレーシア論における基本的な理論的前提をめぐる問題であったのではないかと考えられる。これを機会に、マレーシア研究者のあいだで、こうした問題にかんするより深い議論が盛んになればと思う。